

12月3日(水)

待ちに待ったモロッコへの出発日。

朝7時半、自宅を出発。

ラッシュアワーの中、大きい荷物を持って移動するのは大変。

ほとんどの乗客は職場へ向かうだろうけど、自分はこれから憧れのモロッコへ自由気ままな一人旅
何故か、おかしな優越感を感じてしまった。

成田空港に到着。チェックインを済ませ、手荷物検査へ。

機内で水分補給に困らないようにと、売店でペットボトルのお茶を購入したが、
液体は100ml以下でないと機内に持ち込めないとのこと。

しぶしぶ、空けてもいないのに処分する羽目に。

しかし、搭乗口に進んで行くと飲料の自動販売機があり、

そこに、「こちらで購入の飲料は、機内に持ち込み可」と…。

うーん、理不尽だ！これまでこんなことは、確か無かったような気がするのだが…。

ちょっと不機嫌になったが、細かいことは気にしない。

パリ行きの搭乗口の前、8割は日本人だった。

辺りを見渡し、空想を巡らす。他の人達はどこへいくのだろう…。

ビジネスなのか観光なのか、パリで過ごすのか、それとも他のヨーロッパの国なのか、
自分と同じくモロッコへ行く人はいるのだろうか、モロッコって一体どんな所なんだろう…。
空港のこの雰囲気、またいい。

そしてパリへ向け、飛行機は離陸。

とにかく、パリまでは長い。

本を読んだり、音楽を聴いたり、居眠ったり、ガイドブックを読んだりして時間を過ごす。

機内食も2度あった。ドリンクも、アルコールが無料で飲めるのがいい。

エールフランスということで、赤ワインを飲んだ。

約12時間後、パリ到着。

飛行距離10000km、今までにない長時間のフライト、かなり疲れた。

とにかく腰が痛い。

空港のカフェで約3時間待ったあと、カサブランカ行きの航空機に乗り継ぎ。

搭乗口の前、多くはスーツを着たモロッコ人男性と欧米人のビジネスマン。

イスラムスカーフを巻いた女性の姿も。

日本人は見た限り、自分一人だけのようだ。

あと3時間後には、念願のモロッコに初上陸！ワクワクしてきた。

そして飛行機は離陸。

この便でも機内食が出されたが、あまりおいしくない。

機内で入国カードが配られ、書き方がよくわからずペンを止めていると、

隣に座っていた紳士的な欧米人の男性が、一つ一つ分かりやすく教えてくれて、何とかなった。

職業を書き込む欄があったが、自分の職種である営業、販売職を何と書いてよいか分からず、

この男性が「例えば、ストゥーデントとかエンジニアとか」とアドバイスしてくれた。

実際は違うが、職業はエンジニアで通すことにした。

長時間フライトの疲れからか、居眠ってしまい、カサブランカ空港着陸直前に目が覚めた。

そして遂にモロッコ初上陸！

入国審査は難なく通過したが、手荷物を受け取る場所がよくわからない。

空港の職員に尋ねて教えてもらい、受け取って出口へ。

「出口付近に送迎のドライバーが、F様の名前の書かれた紙を持ってお待ちしています」と、

遠藤さんからの案内に書いてあったので、すぐに見つかるのかなと思っていたが、探すまでもなく、

大きく自分の名前が漢字で書かれた紙を持って、ドライバーの方が立っていた。

ドライバーの方は見た目、黒人とアラブ人のハーフのような感じ。

「モロッコ、ハジメテデスカ？」「マラケシュ、イキマショウ」と日本語で話しかけられ、驚いた。

両替を済ませた後、約2時間半、高速道路を走る。

高速道路も日本とは、また違った情景。

深夜2時、マラケシュのホテルに到着。

フロントが暗くて、ちゃんとチェックインできるか不安だったが、

ドライバーの方がチェックインのお手伝いをしてくれて安心。

長旅で疲れていたなので、到着後、シャワーを浴び、すぐに就寝。

12月4日(木)

前日到着が遅かったが、たくさんマラケシュを観光したいので、早めに起床。

日本と9時間の時差があるが、思ったほど時差ボケは感じない。

朝食後、身支度を済ませ、いざ出発！

しかし、初の海外独り歩きだけに、かなり緊張する。

マラケシュは2日あるので、初日は主に史跡地区を巡り、時間があればフナ広場の北にあるスークにも足を伸ばそうとプランを立てた。

今回はガイドを頼まず、自力で観光することにした。
どのように話して頼むのかも分からない。

まずは、マラケシュのシンボル、クトゥビアを目指す。
歩き始めてから 10 分もたたないうちに、「ヨウコソ」「ニホンジンデスカ？」などと
モロッコ人に、日本語で声を掛けられる。
そして、クトゥビアの前に到着し、左手の方を見渡すと、フナ広場が見えてきたので、近くまで行った。



フナ広場の広さは想像以上だった。とにかく広い！
まだ、午前 9 時頃だったので人もまばらだが、夜になったらどれくらい賑やかになるのだろう…。
楽しみだ。

次に、ここから史跡地区まで徒歩で移動。
まずは、サアード朝の墳墓群を見ることに。

中に入っていこうとすると、一人のおじいさんが声を掛けてきた。
手には、金属製の腕輪をたくさん持っている。物売りだ。
別に欲しくもなかったのですが、「ノー、ノー」といらない意思表示をしながら中に入っていこうとするが、
このじいさんが、またしつこい！
150DH のところを 100DH にするだとか、おまけに何本かつけるだとか…。
何回断わっても、頼むから買ってくれといわんばかりに付いてくる。
さすがに自分も根負けしてしまい、たいして欲しくもないが、仕方ないから買ってあげることに。

そして、サアード朝の墓廟を見学。
色鮮やかなモザイクタイルで飾られていて、非常に美しい。



次にバイア宮殿へ。

ここも中庭が大変素晴らしく、写真を何枚も撮った。



そして、この後、エル・バディ宮殿に行こうと思い入口を探すが、

なかなかそれらしき場所が見当たらない。

本を見ながら探して歩いていると、一人のおじさんが声を掛けてきた。

満面の笑顔で「ハロー」と言いながら、「どうしたの?」と聞いているようだったので地図を指差し、ここに行きたいと言った。

すると、このおじさんが「カモン、カモン」と言うので、そこまで案内してくれるのだらうと思い、

チップを少し取られることを覚悟でついていったのだが...

これが悪夢の始まりだった。

何やら、塀で囲まれた門の前に案内された。

ここが、エル・バディ宮殿の入り口か?

門を開けると、大きな敷地に墓がたくさん...

ここはエル・バディ宮殿ではなく、ただの墓地だった!

しかも門番にチップを渡してくれと言われ、5DHを渡したが、それじゃダメだと言われ、

仕方なく20DHも払わされる羽目に。



そして中を色々案内され、お祈りをする小屋のような所に入った。
中にはロウソクが1本立っており、その周りには小銭が置いてある。
するとこのおじさん、ここに5DHを置いてお祈りをしろと言う。
小銭を出そうと思い財布の中を見ると、肝心の5DH硬貨がない。
代わりにこれでいいやと思い1DH硬貨を置くと...。
このおじさん、それじゃダメだと言ってきた。
しかし、財布にはもう硬貨がなく、一番少額で50DHの紙幣しかない。
こんなのに50DHも置いてたまるか！と自分も必死に抵抗したが、どうやら小銭を出そうとしている時、
財布の中に50DH紙幣が入っているのを見られていたみたいだ。
全ての言葉は理解できないが、「ユア、オールファミリー」という言葉は聞きとれた。
家族の分も置いてお祈りするようにと言いたいのだろう。
それでも自分は抵抗し続けた。
すると、このおじさん、ポケットから20DH紙幣を出し、これをあげるから、置いてくれと言ってきたので、
仕方なく応じることにした。

はぁ～、変なのに捕まっちゃったなぁ、早く終わんないかな...と思いながら墓地をあとにしたが、
まだ終わりじゃなかった！
とにかくこのおじさん、「ノープレブル」「ユアーフレンズ」という言葉を連発し、やたら握手してくる。
その行為が逆に信用できない！

次に案内されたのは、この墓地の近くにある食料品のスーク。
歩きまわり、何やらあれこれと説明し始める。
そして、スパイスや香水、香料などがある1軒の店へ案内された。
マイフレンズと言っていたので、どうやらこのおじさんの友人の店のようだ。

到着するやいなや、座って座ってと促され、ミントティーがふるまわれた。
店の人があれこれ商品の説明をし始める。
あまり興味がなかったので適当に聞き流していたが、時間が経つにつれ、
何か買わないと出られない雰囲気になってきた。
仕方ないので、香辛料とジャスミンの香りがする石を購入。
値段が全部で150DHほど。かなり高買いさせられたように感じた。

値札はあったが、物価が安いはずのモロッコで、現地の人にはおそらくこの値段で売っていないのでは、と疑問を感じる。

そしてこの後、軽くスークを一回りしたところでようやく案内が終了。
するとこのおじさん、案の定、お金をくれと言ってきた。しかも 200DH！
しかし、自分もガイド料の相場は知っていたので、仕方なく 100DH だけ払う。
だが、それだけでは引き下がらず、もっとくれとつこく言われ、さらに 20DH 取られた。

マラケシュを歩き始めてわずか 2 時間、変なオッサンに捕まったおかげで、1 時間ムダに過ごし、さらにこの 1 時間で 200DH 近く持っていかれた。
しかも、たいしたことをしてないのにチップに対して、事あるごとに「少ない」とケチをつけるとは何事だ！
モロッコ人はこんな人間が多いのか？ すごく複雑な心境になった。
言葉がうまく話せず、反抗したり、断れなかったのが悔しい。少し自己嫌悪に陥った。

しかもこの時間、エル・バディ宮殿には入れないことに気づいた。
初めからあのオッサンは、エル・バディ宮殿に連れて行く気はなかったのが腹が立つ。
しかし、まだ旅は始まったばかり。
慣れ慣れしく話し掛けてくるモロッコ人は、基本的に無視しようと心に決め、フナ広場へ向かう。

フナ広場近くのケバブの店で昼食。
午後はマラケシュ博物館やベン・ユースフ・マドラサを観光しようと思い、
フナ広場の北のスーク街に入った。



モロッコ最大級のスーク街ということで、人の数、店の数がとにかく多い！
特に驚いたのは、日本語の客引きや、日本語で声を掛けてくる人が多いこと。
「コンニチハ」「アナタハ、ニホンジンデスカ」は当たり前。
「カラテ」「ヤクザ」「バカヤロ」などの単語も出てきて、さらには「アキハバラ」「ソナノカンケーネ！」
と言ってくる人も。
しかも、小島よしおのムーブ付きだ。一体どこで覚えたのだろう...不思議だ。

とにかくここは、モロッコ人の生活感、喧噪感タップリのエリア。

自分が今まで歩いてみたかった、体験してみたかった場所を今歩いている！
とても嬉しくて楽しくしょうがない！

はじめは、ガイド本の地図を見ながらスークを歩いていたが、
歩き始めて2、3分で、どこを歩いているのか全くわからなくなった。
ちゃんと戻れるかな…。少し心配になったが、とにかくまっすぐ行けるところまで行くことにした。

すると、緑色のモスクが見えてきて、そのすぐ側にはマラケシュ博物館が、
ようやく分かる場所に来て、ホッとした。



クッバ・バアディン、ベン・ユーセフ・マドラサ、マラケシュ博物館を見学し、博物館の中にあるカフェで一休み。

このマラケシュ博物館の中にあるパティオ(中庭)が、また素晴らしかった。

その後来た道を戻り、フナ広場へ。
帰りは迷わずに、すんなりと帰ることができた。

フナ広場では、すでに屋台がオープンし始め、何人かの大道芸人達がパフォーマンスをし、
人だかりの輪ができています。

そこで、一人の蛇使いに声をかけられる。
「ノープロブレム」と言いながら、蛇を肩にかけてくる。
そして、「ピクチャー、ノーマネー」というような事を言ったので、何枚か蛇を撮影させてもらったが、
さらに写真を撮ってあげると言ってきたので、蛇を肩や首にかけて4~5枚撮ってくれた。

しかしこの後、蛇使いが「ファイブピクチャー、トゥエンティ」と言ってきたので、チップを払えと
言ってるんだなと思い20DHを渡そうとすると、この蛇使いがとんでもないことを言い出した。

「トゥエンティダラー、だからトゥーハンドレッドDH」

ん？何？200！？冗談じゃない！

大体あんた、初めにノーマネーと言ったじゃないか！

自分も必死で抵抗したが、写真を撮った事実だけは消せない。

しばらく言い合いになり、収集がつかないので仕方なく、言い値の半分 100DH を渡したら、あっさりと引き下がった。

しかし騙されたことには変わらない。

ガイド本にも、ヘナ描きグループで、この手の騙しをする人がいるから注意してと書いてあったが、まさかこんな形でやられるとは...

やはり日本人は、たくさんお金を持っていると思われるだろうから、絶好のカモになってしまうのかなと感じた。

これで、モロッコ人の「ノープロブレム」「ノーマネー」という言葉が、いかにあてにできないかが分かった。

気を取り直し夕食。

夕食はフナ広場の屋台ですることにした。

これも自分がモロッコでしかかったことの一つだ。



屋台の客引きも凄い。

中には、カタツムリを煮たものを出している屋台があったのには驚いた。

さすがにカタツムリは食べる気にならず、とりあえず 1 軒の店に決め、カバブとオリーブの実を注文。

するとそこに、物乞いらしき一人の老人がオリーブの実を 1 個くれと言ってきたので、あげることに。

しかしこの老人、隣のテーブルの客の残り物に手を出そうとしていたところを屋台の店主に見つかり、店主が物凄い形相で怒鳴り、追い払っていた。

物乞いの老人もその行動にエキサイト。持っていた杖を振りかざそうと構えた。

両者に間ができたところで、この騒動はおさまった。

街を歩いている時も、物乞いの姿は数人見かけた。

直接お金をくれと言ってくる人、何やら唱えながら施しを求める人、地べたに座り込んで施しを求める人など。

人々の生活に貧富の差がかなりあるのだろう。そう感じた出来事だった。

夕食を終えた後は、フナの輪巡りをした。

写真を撮るならまだしも、見ているだけでチップを要求してくるのが厄介だったが、この広場の雰囲気 genuinely 楽しい。

マラケシュ初日、変なオヤジに捕まったり、騙しに遭うなど嫌なこともあったが、モロッコを肌で体感できた一日だった。
明日はとにかく騙されないようにしよう！
そう心に誓って、この日は就寝。

12月5日(金)

前日、主な観光スポットは見学したので、この日はメディナの雰囲気存分に味わい、買い物をしようと計画を立てた。

まず、新市街にあるメナラ庭園を見学し、その後タクシーでフナ広場へ。
そして、スークへと入っていく。
前日、ひと通り歩いたこともあり、かなりマラケシュの地理がつかめている。

自分が欲しいものは、バブーシュと陶器。

まずはバブーシュの店へ。
数種類試着させてもらった後、いよいよアラブ式商談の値段交渉へ。
店主がメモ紙とペンを持ってきて、筆談でやりとり。
初め、店主の希望が 350。
けど、自分は 250 で買いたい。
しかし、店主は 280 でどうだと。
なら、自分は 270 ならいいよ。ということで、交渉が成立した。
交渉成立した時、お互いに笑顔。
このやりとりが、なかなかおもしろかった。

そして、次に陶器の店へ。
ここでも同じように商談し、陶器 2 点を 60DH で購入。
ここでは店主と、お互い片言の英語で世間話ができる。
店にパソコンがあり、それについての話題だった。
「パソコン何使ってる？モロッコは、まだまだパソコンの技術が発展してなくてね、日本はすごいでしょ？」などなど、色々話ができ楽しかった。

そして買い物をしながらスークを歩いていると、昨日来たマラケシュ博物館の前まで来た。
カフェで一休みした後、次はマドラサから奥に入っていった所にあるはずのタンネリ(皮なめし職人街)へ行こうと歩いていくのだが、それらしき場所が全く見当たらない！

こっちだろうと歩いて行くと....

まずい、迷ってしまった。来た道もよくわからない。
どっちへ行くと何があるか、もう方向感覚が全くわからなくなってしまったが、しばらく歩くと大きな学校があり、校門の前には子供がたくさんいる。
その子供2~3人が声を掛けてきたので、「フナ広場はどっち？」と聞くと、指を差して、こっちだよと教えてくれた。

その通りに歩いていくと、スーク街の見覚えのある場所まで出てこれた。
良かった、助かった。
迷ってしまったが、これも一人旅でしか味わえない体験だと感じた。
しかも、観光客が足を踏み入れない地域まで来て、マラケシュに住むモロッコ人の生活ぶりを見ることができて、これもまた非常に楽しかった。

歩き疲れたので、フナ広場近くにあるレストランで昼食をとり、しばし休息。
でも、やはりタンネリは見ておきたい。
もう一度、タンネリを目指して出発。

マドラサの奥の道を、もう一度進んでいく。
今度はマドラサを背にして左側の道に入っていくと、一人の10歳くらいの少年が「タンネリ、タンネリ」と声を掛けてきた。
タンネリに連れて行ってくれるのだろうか？
ちょっと不安だったが、道もよくわからないので、チップをあげるつもりでこの少年に連れて行ってもらうことにした。

歩くこと約5分。タンネリの前に到着。
中には案内人がいて、色々タンネリの説明が始まった。
どうやらここは、皮をなめすだけで、染色はしていないようだ。
写真を何枚か撮った後、皮製品のショップを案内されたが、特別ここでは買う気はなかったので、案内人にチップ10DHを渡し、出ようとする...。この案内人、チップが少ないとケチをつけてきた。何やらかんやらと言っていたが、意味があまり理解できないので、仕方なくもう10DHを渡してタンネリをあとに。



外には、道案内をしてくれた少年が待っていた。

出会った場所まで案内してくれるようなので、ついて行く。

その間に、自分は案内してくれたお礼にと財布の中にあった、ありったけの小銭(6DH)を少年に渡したが、少年は小銭を数え始め「1,2,3,4,5,...6DHしかないよ！」と言い出し、そのお金を返してくる。

自分も「オール・スモール・マネー」と言って、もう一度手渡そうとするが、少年は受け取ろうとしない。

するとこの少年、歩きながら「マネー・エクスチェンジ」と言ってきた。

両替所に連れていこうとしているのだな！

しかし、このままついて行ったら、いくら取られるか分からない。

自分は、これで勘弁してくれと思いながら少年に小銭を渡すが、少年はまた返してくる...

歩きながらこんなやりとりをしばらく続けていると、この少年の知り合いなのだろうか、道端にいた一人の青年が、「もういいよ」と言わんばかりに少年の行動を止めさせた。

ふう～、何とか振り切った！

しかし、本当にお金に対する執着心が凄い。

この時、まだ時刻は3時。

ほとんど見どころは回ったが、まだまだ時間があるので、スーク街を歩いて疲れたらカフェで一休みするという行動を、気が付いたら3回も繰り返していた。

特に、マラケシュ博物館の中にあるカフェは、非常に落ち着く。

外国人もたくさんいて、片言の英語で少し会話もできた。



特別買い物をしなくても、スーク街を歩いて、モロッコ人の生活感、喧噪感をたっぷり見学するだけでも非常に楽しい。何回行っても飽きない。

フナ広場の屋台で売られているオレンジジュースも、安価でとても美味しい。

のどが渴いては、このオレンジジュースを飲んだ。

屋台のおじさんも気さくで、とても感じがいい。

そしてぶらぶら歩いていると、モロッコ人の男性が日本語で、

「ライターを貸してくれませんか？私の壊れてしまって」と話しかけてきた。

随分流暢な日本語を話すモロッコ人だなあと、持っていたライターを貸すと...

すぐ横には日本人の女性がいた。

話を聞くと、このお二人はご夫婦で、以前は東京に住んでいたという。

ここで20～30分ほど、このご夫婦と立ち話。

犠牲祭の様子、フェズのおすすめホテル、自分の旅行の行程のことなど、

色々な話題で話ができ、楽しかった。モロッコに来てから、初めて日本語で会話できた。

話題の多くは犠牲祭について。

「ヒツジ殺して、さばいて、すぐ食べる。とてもおいしい！」と語っていた。

犠牲祭当日は、フナ広場で盛大にお祭りが行われるという。

モロッコの伝統的行事だから、是非見てもらいたいと言っていた。

今年は、12月9日だそうだ。

9日は、メクネスへの日帰りツアーの日だ。犠牲祭の影響はあるのだろうか…。

このご夫婦とお別れし、今日もフナ広場の屋台で夕食。

今日は、カバブやハリラに加え、パスティラを注文。

シナモンパウダーがかかっており、これがなかなかおいしい。

次に広場が見渡せるカフェに行き、ミントティーを注文。

ここでも、やたらハイテンションなモロッコ人のおじさんが英語で話しかけてきて、20分ほど会話。

お酒は置いてないはずなのに、なぜか酒に酔ったようなテンションの高さだ。

タバコを1本交換しようと言われ、自分が持っていたメンソール入りのタバコをあげると、

「チューインガムみたいだ」と言って、笑っていた。

さらに日本語で「カンパニー」と言い出し、グラスとコーヒーカップで乾杯までした。

しかもこのおじさん、「あの人はジャーマン、あの人はスパニッシュ」などと言っていて、

他国の観光客にもやたらに話しかけていたようだった。

店の人に「コーヒー1杯で長時間いるな。帰れよ！」みたいなことを言われていて、

迷惑がられていたのには笑えた。

今日はこれまで、迷ったり何だかんだあって、かなりの距離を歩いていて、足が痛い。

しかし、まだまだ歩き足りない！夜のスーク街を歩くぞ！

自分の冒険心が、さらに湧いてきた。

夜8時半だが、スークの人通りは全く絶えず、買い物をしている人がたくさんいる。

しかも、この狭い通りを馬車やバイクが通る。

この情景を写真、動画を撮りながら歩きまわる。

本当にモロッコらしさが溢れていて、何度歩いても飽きることがない。

ずっと訪れてみたいと思っていたモロッコ。

今までは訪れる時間が取れなかったり、一人で海外を旅する勇気がなくて来れなかったが、

今回念願が叶って来ることができた。

そして、そのモロッコの地を、今この場で歩いている。

世界地図を思い浮かべながら、モロッコの位置を確認し、今自分はここにいるんだと空想する。

今までにない喜びを感じた。

9時過ぎまでスーク街とフナ広場を行ったり来たりして、さすがにもう足が限界。

フナ広場とクトゥビアに別れを告げ、ホテルに帰った。

本当に、マラケシュはエネルギッシュな街で、楽しかった。

初日こそボラれたが、2日目は全く問題なく過ごせた。

靴下を脱ぐと...靴擦れができていた。触れるだけで痛い。

でも、そんなことはどうでもいい。心行くまで歩いてマラケシュを楽しんだから。



12月6日(土)

今日から4日間は、モロッコの大自然と世界遺産を巡る、現地ツアー。

混載ツアー車ということで、一緒にまわる観光客はどんな人？何人かな？などと想像していたが、自分一人だけだった。

寂しい気もするが、その方が気楽でいいのかも。

ドライバーは、空港からマラケシュまでの送迎と同じ方だった。

マラケシュを出発して1時間ほどすると、山道になってきた。

途中には、遠くまで見渡せる絶景ポイントがいくつもあり、そのポイントごとに停車してくれて、写真を撮何枚も撮った。



さらに、山羊の群れを見かけることも。

走っていくにつれ、日干しレンガの家を見かけるようになってきた。
そして車窓から「アイト・ベン・ハッドゥ 6km」の標識が見えたが、
車は舗装されていない砂利道に入って行く。
この先にあるのか？

しばらく進み、駐車場に車を止め、レンガの家並みを歩いていくと...、遂に見えてきた。
小川の対岸に見える、あれがアイト・ベン・ハッドゥだ！
今いる側は、新しく移り住んできた村だという。

アイト・ベン・ハッドゥが見渡せるレストランで昼食。
ハリラとモロカンサラダ、ポテトタジンというメニューだったが、このポテトタジンがとてもおいしかった。

そして昼食後、徒歩で小川を渡り、アイト・ベン・ハッドゥの中へ。
観光客がたくさんいるイメージを持っていたが、自分以外全くなかった。
レンガの階段を上り、頂上へ。

とにかく壮観だった。
古代の城を歩いているような感覚だ。
頂上からの眺めも最高！

下りてくる途中、ここに住んでいる家族の家でミントティーを頂く。
ここは映画のロケ地としても有名な場所らしく、ここで撮影された映画のタイトルの一覧表も
見せていただいた。

そして、アイト・ベン・ハッドゥを後にし、ワルザザードを目指して走っていくが、この時まだ時刻は昼 2 時。
ここからワルザザードまでは、約 30 キロ。
早く着きすぎるのではと思ったが、車はこの近くにある、ヤシの木がたくさんあるオアシスのような村へ
入っていく。

しかも道路は未舗装。小川をいくつも車で渡る。
こんな体験したことがない！

川で洗濯をしている人々も見かけた。
車の後部座席は空いているので、ドライバーの方が、村のモロッコ人を乗せては降ろしていた。
知り合いなのかもしれない。

そして、このオアシスにある1軒の家のテラスで休憩し、ミントティーをいただく。
そこに1個ベルベル音楽の太鼓があり、ドライバーの方がリズムを取りながら陽気に叩き始める。
「ユーもやってみな！」と言われ、トライ。
三三七拍子のリズムで太鼓を叩いていると、「ナイス！ジョウズ！」と言って褒められ、
思わず笑ってしまった。
ここで1時間ほどのんびりと休憩した後、ワルザザードのホテルへ。

夕方5時ホテル着。
ドライバーの方とお別れし、チェックイン。
ここはマラケシュとは違い、とても静かな街だ。

一休みした後、夕食をとりに街の中心部まで徒歩で行こうとするが、昨日歩き過ぎたせいか、
かなり疲労がたまっており、足もまだ痛い。
明日からは砂漠ツアーがあるので、今日は散策を断念。
ホテルのすぐそばのレストランで夕食を済ませ、この日は早めに就寝。

12月7日(日)

今日は、いよいよ砂漠に行く日。
ここも、前からずっと行きたかった場所。
雄大な砂漠で満天の星空、日の出を見るのが本当に楽しみ。
幸いにも天気は快晴。

8時にドライバーと待ち合わせ。
車はカスバ街道へ入っていく。
土レンガで造られたカスバの数々。本当に美しい。
ビューポイントでは車を停車し、たくさん写真を撮った。

その後、モロッコ南部でしか取れないというアルガンオイルの専門店へ立ち寄り。
中では、アルガンの実から石臼で挽いてペースト状にし、オイルを抽出する行程を見ることができた。
この行程を英語で案内してくれたモロッコ人の女性が、とても綺麗で美人な方だった。
アルガンオイル、良いのは分かったが、やはり価格は高い。

料理用の 300ml 位の容量で 150DH だが、一度使ってみたいので購入した。

そして、車はトラ峡谷へ。

とにかく、このトラ峡谷は圧巻！こんな峡谷は日本では見たことがない。

断崖絶壁の岩が目の前に迫っている。



車を降り、小川沿いを歩きながら見学。

すると、一人の子供がやってきて、わらで作ったような人形を渡してきた。

くれるのかと思い、受け取ると「金をくれ」と言ってきたので、返した。

ちょっとかわいそうな気もするが...

こんなところに、ホテルやレストランがあり、ここで昼食。

メニューは、定番ハリラと、今回初めてのクスクス。

ハリラは店によって味が異なり、ここではカレー風味のハリラだった。

クスクスは、粗粒状の小麦の量が多く、途中で飽きてしまい、半分くらい残してしまった。

タジン、ハリラは口に合うが、クスクスはもういいやという感じだ。

昼食後、車はエルフードを抜け、未舗装の平原をひたすら走っていく。

周りには、建物1つ建っていない。

進んでる方角がわかるのか...と思ったが、走っていくと、広大な砂漠と同時に

幾つかの建物が見えてきた。砂漠入口のロッジだ。



1軒のロッジの前で車を降り、ラクダを待つ間、ドライバーの方と一緒にミントティーを飲みながら休憩。すると、ここでドライバーの方が「私は、今日まで。私はフェズ方面のことはあまりよく知らないんだ。明日からは別のドライバーが来ます」と語ってきた。



私が乗るラクダの準備ができたようだ。

今日でお別れか...

自分も、もっと英語が話せれば、もっとたくさんコミュニケーションがとれたかもしれない。

色々聞きたいことがあっても、どう話して聞けばよいか分からず、そのことに少し悔いが残る。

でも、お互い英語は母国語ではない。その中でも口数は少ないが、ある程度の会話や意思の疎通はできたし、モロッコに初めてきた自分を楽しませようとしてくれた気持ちは素直に感じた。

少し別れがさみしくて涙ぐんでしまった。

最後にラクダに乗る前に、砂漠をバックに肩を組んで記念撮影をした。

ドライバーのRさん、本当にありがとうございました！



さて、これからラクダに乗り、砂漠のど真ん中へ。
ラクダにまたがると、すっと起き上がり、ゆっくりゆっくり歩きはじめる。
ラクダ引きは、ベルベル人の若い青年。
引きながら日本語で「ダイジョウブ？」と声を掛けてくれた。
さらには、「ラクダはラクだ」というシャレまで日本語で言っていた。
ラクダに乗っている自分を写真に撮ってくれた。

目の前は、砂漠の大砂丘。
遙か向こうには何も見えない。一体どこにテントがあるのだろう…。
砂漠は、かなり起伏に富んでいる。丘を登ったり下ったり。
所々にラクダの足跡、四輪駆動車の通った跡がある。

自分は今、サハラ砂漠の大砂丘をラクダに乗って歩いている…。
乗っている間、笑みがこぼれる。嬉しくてしょうがない。

歩き始めて1時間ほど経過。
ラクダ引きの青年が「sunset!」と後ろの方を指差すと、
そこにはちょうど地平線に日が沈んでいこうとするところだった。



素晴らしい眺め！
こんな美しい日の入りを見たことがあっただろうか！
ここでラクダを止めて写真撮影。

日が落ちてから、辺りはすっかり薄暗くなった。
砂漠には、すすめのような小鳥や、真っ白なネズミがいて驚いた。

そして、いよいよテントが見えてきた。
ラクダでここまで1時間半。ラクダを降りたとき、お尻と股関節が痛かった。
でも初めてのラクダ乗り。本当に楽しかった。

まずは大きめのテントの中に案内され、ラクダ引きの青年と会話しながらミントティーをいただく。
テントの中には猫が数匹いて、そばに寄ってくる。とても人なつっこい猫だ。

この時まだ他の観光客はおらず、自分一人だけか？ ちょっと寂しいなと思っていたが、
そこに外国人の女性3人組が入ってきた。
欧米人なのはわかるが、どこの国の人かは分からない。
とりあえず、一人ではなくてホッとした。

この日の夕食はタジン。
大きいチキン、野菜がたくさん入っており、とてもおいしい。

テントにいた猫が、いい匂いにつられて寄ってきた。しかも3匹も。
テーブルに手をのせ、鍋に手を出してくる。
自分を取られまいと、鍋の位置を少しずらすが、それでもこの猫は諦めず、回り込んで具を狙ってくる。
もう、お腹もいっぱいになったので、あとは猫の好きにさせた。
猫は残ったチキンを取り出し、おいしそうにむさぼる。他の猫が寄ってくると「シャー」と言って威嚇している。
猫は本当に独占欲が強く、自由気ままな動物だ。

夕食後は、このテント村の真ん中でキャンプファイヤー。
とにかく夜の砂漠は寒かったので、これはありがたい。
ベルベル人の青年たちが、太鼓を叩きながら歌を披露してくれた。

そして、火を囲んで皆で会話。

ベルベル人の青年と3人のヨーロッパ人女性は、何語だかわからない言葉で話し続けている。
一人のベルベル人に何語かを聞くと、これはスペイン語だった。
そういえば、会話の中で「シエスタ」という単語が出てきていたのを思い出した。
スペイン語で自分が知っている単語といえば「シエスタ」くらいだ。
この3人は、スペイン人だった。

自分は会話になかなか入れなかったが、この女性グループの一人が気を利かせてくれて、
英語で「フレンズ イン ジャパニーズ？」と聞いてきた。

自分が「トモダチ！」と答えると、相手も「トモダチ～！」と言ってきて、お互いに握手。ここから色々な物を指でさし、その名称を自分が日本語で答えるという質問形式の日本語講座が始まった。

ここでも驚くことに、ベルベル人の一人が秋葉原を知っていた！秋葉原は、もはや世界的に有名な町になっているみたいだ。

この火を囲んでの会話が、夜 10 時位にまで及んだ。

そして、寝るテントの中を見せてもらう。

布団が敷いてあり、毛布が何枚か置いてある。明かりは蠟燭 1 本。とてもシンプルなつくり。

遠藤さんが言っていた通りだ。

意外と、中は広く感じた。

寝る前に外に出て、一人で満天の星空を眺める。

360 度が星空！

砂漠で見る星空は最高だった。

嫌なことを全て消し去ってくれるような、そんな星空だった。

このまま 20 分ほど星空を鑑賞。

さすがに寒くなってきたので、今日はこらへんで就寝。

寒いので、ダウンジャケットは着たままで、その上に毛布を 3 枚ほど重ねて寝た。

最初、ロッジに泊まるかテントに泊まるか迷ったが、このテントに来て本当に良かった！

凄くいい体験ができた。



12月8日(月)

砂漠の日の出は、朝 7 時頃だとベルベル人の青年が言っていたが、朝 6 時頃目が覚めた。

途中 1 回起きたが、思いのほかぐっすり眠れた。

テントの外に出ると、まだ薄暗い。

日の出まで、まだ時間があるので、ぶらぶらテントの周辺を歩く。

テントから少し離れたところに、ラクダが口をモゴモゴさせながら座っていた。
少し距離をとり、正面に回りこむと、ラクダと目が合った。とても愛嬌のある顔をしている。
さらに、猫もすり寄ってきた。

動物たちと戯れている間に、だんだん夜が明け、明るくなってきた。
暗い時はよく分からなかったが、今いるテントの他にも、幾つかのテントの集落があった。

そして、朝7時過ぎ。ようやく日が昇り始めた。
いつの間にか、観光客が全部で20人くらい、テントのすぐ裏にある大きい砂丘に登り始めている。
自分も一緒に登り始め、朝日を鑑賞した。



砂漠の朝日、とても感動的だった。
何てすがすがしい朝なんだろう！
とても気持ちがいい。

鑑賞後、テントに戻り、朝食を食べ、テントを後にした。

ロッジに戻ると、ベルベル人のジュラバを着たドライバーの方が出迎えてくれた。
人生初のキャンプが、この砂漠キャンプだった。
とてもいい思い出、体験になった。

砂漠に別れを告げ、車に乗り込む。
さて、今日はフェズに向けて500kmの大移動をする日。
途中、エルフードでは、沢山のグランタクシーを見かけた。
日本でいう軽トラックのような車の荷台に、10人位載せている車もあり、
ドライバーの方が言うには、これもグランタクシーだという。
日本ではこんな事ありえない。

昼食は、ミデルトにあるおしゃれなレストラン。
無料のアラビアパン、オリーブの実、ハリラ、タジンとお決まりのメニュー。
タジンは毎日のように食べているが、味や具がそれぞれ若干異っており、飽きることはない。

昼食後、車はさらに北上。

それにしても、このツアー会社のドライバーさんは、運転が非常にうまい。
ハンドルさばき、車線変更、対向車との距離を計りながら車を追い越すタイミングなど、
どれも素晴らしいテクニックだ。

すると、車窓はだんだん雪景色になってきて、スキーを楽しむ人々も見える。
途中通ったイフランの町は、日本でいうならば軽井沢のようだった。

日が暮れる頃、フェズの新市街に入った。
ヨーロッパ風の建物が立ち並び、街並みがきれいだ。
大きい庭をもった豪邸も多く見かけた。

そして夕方 6 時頃、ホテル・ムーニアに到着。
マラケシュ、ワルザザードのホテルより外観、室内ともゴージャスだ。
部屋に入るやいなや、長旅で疲れたせいか、すぐにベッドに横たわり居眠りしてしまった。

目が覚めると、夜 9 時。
すぐにホテルのレストランに行き、遅い夕食を食べる。久々にタジン以外の物を食べた気がする。
今日は、疲れているせいもあり、早めに就寝した。

12月9日(火)

今日は犠牲祭の日だが、メクネス周辺への日帰り観光ツアーなので、
列車等の主要交通機関のことは心配なくていい。

朝、ホテルのレストランで朝食をとっていると、周りは外国人でたくさん。
特に欧米人が多いが、中には中国人や日本人の方もいた。

9 時にホテルを出発。



まずは、メクネスへ。マンスール門の前に到着。
ここから、ムーレイ・イスマイル廟に行く予定が...

犠牲祭の影響で閉まっており、中に入ることができず。
残念だが仕方がない。

マンスール門を写真に収め、出ようとする、そこに自分と同じく一人旅をしていた日本人の学生らしき男性がいたので、声を掛けた。
話を聞くと、1日1本しかない目的のバスが、犠牲祭の影響からか、すでに出てしまったようだ。ここにも犠牲祭の影響を受けた人がいた。
この学生、かなり途方に暮れていた。自分の場合、まだ足があるからいい。

次は、ヴォルピリス遺跡。
ここはさすがに、閉まっていなくて安心。
周りは欧米人の観光客だらけ。
ここでは、公認の英語ガイドが付いて案内してくれた。



このようなローマ遺跡を実際に見学するのは、初めてだった。
床や壁に残っているモザイクは、当時の状態ほぼそのままに保存されているというから、見事だ。
モザイクの絵から、その場所が当時どのような場所だったのかが、わかるようになっている。
商店なら何の店なのか、わかるような絵が描かれている。
特に凱旋門は素晴らしかった。

その後、すぐにムーレイ・イドリスに向かう。
町の入り口で車を降り、徒歩で坂や石段を登っていく。
入口近くに緑色の円柱形のミナレットがあり、その周りにアラビア文字が書かれている。
犠牲祭の影響からか、町は閑散としていたが、整然としていて、とても美しい。
建物も、モロッコらしさを感じさせる造りだ。



そのまま坂を登っていくと、町を一望できる場所へ。

特に、緑色の屋根の聖廟がとても美しかった。

ここから見下ろすムーレイ・イドリスは、非イスラム教徒は入れないというから、まさに神秘的！

良い写真が撮れた。



そしてこの後、少し遅い昼食。

外国人のツアー客が、たくさん来ているレストランだ。

周りを見渡すと、朝ホテルで見かけた日本人の女性が、外国人のグループ7、8人と一緒に食事をしていた。一体どういう関係なのだろうか？

自分が一人で本を読んでいると、この日本人女性が「一人旅の方ですよ？私も一人旅なんです。

よければご一緒にどうですか？」と声を掛けてきたので、ご一緒させてもらうことにした。

話を聞くと、彼女は現地発のツアーに参加していて、一緒にいる外国人は、

同じツアーの参加者同士だという。

簡単にそれぞれ自己紹介をしたが、この外国人の方々はオーストラリアから来ていた。

しかし、この日本人の方、英語が堪能だなあと考えていたら、なんと帰国子女で、

父親の仕事の都合でエジプトのアレキサンドリアに住んでいたことがあるとのこと。

現在は、日本の大学に通っている学生さんだった。

しかも、モロッコを観光したら、次はチュニジアに行くという。

食事をした後も、ミントティーを飲みながら、会話を楽しんだ。

気が付いたら、1 時間半もここにいた。
このグループに別れを告げ、車はホテルへ戻る。

途中、大雨が降ってきた。しかも、ものすごい風。
でも観光中に降らなくてよかった。

ホテル到着後、夕食をと思いレストランを探すが、犠牲祭で、キオスクとカフェ以外は全て閉まっている。
しかも大雨、強風。5 分歩いただけでビショ濡れ。
さすがにもう嫌になり、この日もホテルのレストランで夕食をとることにした。

今日で、4 日間に渡る現地ツアーが終了。明日からは、またフリーな旅になる。
明日は、いよいよ迷宮「フェズ・エル・バリ」の探検。
天気になってくれれば良いが。

12月10日(水)

朝 7 時起床。
まず、天気の確認。晴れてはいないが雨は止んでいる。良かった。

朝食を食べにレストランに行くと、昨日出会った日本人の学生さんのグループと出会った。
今日は、自分と同じく、フェズの街を観光するという。
迷宮の中で出会うことはあるだろうか。

8 時半、ホテルを出発。
靴ずれで痛かった足は、この 4 日間、大半が車での移動だったため、すっかり回復した。

それにしても他の町と比べ、フェズは格段に寒い。
まずは、明日のラバトまでの 1 等切符を購入するために、フェズ駅まで徒歩で向かう。

15 分ほどで駅に到着。
あらかじめ乗車日、行先、時刻、等級を書いた紙を用意しておいた。
窓口で、その紙を駅員に見せると、あっさり購入できた。
しかも切符が、レシートのような薄っぺらい紙 1 枚。
そこに日付、行先、時刻、等級、席番、値段が記載されていた。

購入後、このまま徒歩で、ブー・ジュルード門を目指す。

まずは、王宮が見えてきた。この王宮の正門前には、日本人のツアー客も見かけた。
そしてここからユダヤ人街を抜け、フェズ・エル・ジェディド通りに入るが、

ここにもまた、しつこい客引きがいた。
「ジュータン、ジュータン」といって、さんざん声を掛けられた。
無視して通り過ぎ去っても、1~2分位、後をつけてきた。
本当に厄介だ。ストーカーかお前は！と言いたくなる。

何とか客引きを振り切って、ブー・ジュールド門に到着。
いよいよ、ここから迷宮入りが始まる。
フェズ・エル・バリのメイン通りは2本。ケビーラ通りとセギーラ通り。
ケビーラは大きい、セギーラは小さい、狭いという意味らしいが、遠藤さんが教えてくれた通り、
どちらも狭い！これがメイン通りか！？という感じだ。

とりあえずケビーラ通りを歩いて行く。
犠牲祭の期間だからか、閉まっている商店も多く、人通りもあまり多くない。
一応、地図を見ながら歩いてきたものの、閉まっている店も多いので、どこら辺にいるのかも分からず、
全くあてにならない。
坂や階段を登ったり降りたり、途中、アーケードのような屋根付きの道に入ったりするので、
本当にメイン通りから外れてないか不安だ。



そして、少し視界が開けた広場に到着。
地図で場所を確認すると、ここはカラウィン・モスクがある、サファリ - ン広場。
いつの間にか、ここにたどり着いた感じで、来た道もよく分からない。
とりあえず、先に進んでみることに。

もはや、どこを歩いているのか、さっぱり分からない。
すると、一人の青年が声を掛けてきた。
どうやらタンネリで働いている人みたいで、そこまで案内してくれるとのこと。
「地球の歩き方」にもタンネリの行き方は載っていたが、実際歩いてみてもさっぱり分からないので、
案内してもらうことにした。
フェズのタンネリは、昔からモロッコのガイドブックには必ず写真が載っており、
今回ここは必ず訪れようと思っていた場所。

作業場に入り階段を昇っていくと、作業場を見下ろせるテラスに来た。

「おお、これがフェズのタンネリか～！」

ガイドブックで見ていた光景が、まさに今、自分の目の前に！

感動した。



臭いはきつかったものの、想像ほどでもない。

犠牲祭の期間中だからか、作業している人は2人くらいで少なかったが、写真も良いのが撮れた！

その後、このテラスにいたおじさんが、この下の階にある皮製品の店を案内してきたが、

マラケシュほどしつこく勧められることもなかった。

去り際に、道案内してくれた青年にチップ10DHを渡すと、快く受け取ってくれた。

さて、これからどこへ行こうかと考えながら歩いていると、トイレに行きたくなってきた。

しかし公衆トイレなど、この辺にはない。

マラケシュの時もそうだったが、このトイレの問題には意外に困った。

日本なら観光地には必ずトイレがあり、もし無かったとしても、コンビニで利用させてもらうなど、

トイレで困ることはあまりないのだが、ここは異国の地モロッコ。

やはり、不便なところは不便だ。

昼時ということもあり、昼食がてらに済まそうと思い、トイレがありそうなレストランを探す...

それがない！ あっても、閉まっているところもあった。

う～ん、困った。あと30分くらいは我慢ができるが、それ以上は厳しい。

とりあえず、ブー・ジュレード門のそばにレストランが何軒かあったのを覚えていたので、

そこに戻ることにする。

街路に、ブー・ジュレード門の方角が矢印で示されている看板が、ところどころにある。

その矢印のとおりに進んでいるのだが...

何回行ってもカラウイン・モスクの前に出てきてしまう。

まさに迷宮フェズ！

しかし、このまま迷っていると、膀胱炎になってしまう。

4回目、二手に分かれる道を、さっきまでは左に行っていたのを今回は右に変えてみた。

すると、見覚えのある通りにきた。そのまま、まっすぐ進んだ。

よく見ると、さっきからブー・ジュールド門への案内板は、上の矢印を指したまま。
このまま、まっすぐ行けばよいのだろう。

ケビーラ通りに出てきた事がわかった。
そのまま進み、やっとブー・ジュールド門に到着。
近くのレストランに入り、即トイレを済ませる。助かった！
自力で脱出した。世界最大の迷路は本当に凄い。

ここでタジンとサラダを食べ、ゆっくり休憩した後、また迷宮に挑戦。
カラウィン・モスクから、さらに先の道も歩いてみる。

狭い道を、生皮を積んだロバが行き交う。
すると今度は、ルシーフ広場に出てきた。これ以上進んで、戻れなくなっても困るので、
ここで折り返し、もう一度ブー・ジュールド門に戻ることにした。



一度迷ったことで、フェズ・エル・バリの地理は、かなり掴めた。
カラウィン・モスクまで来てしまえば、もう大丈夫。
今回は、すんなり戻れた。

時刻は4時。
もう少しすると暗くなってしまうので、迷宮歩きはここでやめることにする。

あと一つ、やり残していることがあった。
それは、フェズ・エル・バリ全体を見下ろせる場所へ行くこと。

フェズ・エル・バリの北にある小高い丘を目指す。
戦争博物館の辺りまで来ると、フェズ・エル・バリの全景が見えてきた。
この辺りは、人が本当に少ない。居たのは、若い男女のカップルと、小さい子供とそのお父さんぐらい。

カップルは、とても幸せそうに話しながら、フェズ・エル・バリを眺めている。
親子は、楽しそうに何やら話している。

そこに、日本から一人旅で来て、佇んでいる自分がいる。
端から見たら、おかしな光景だ。
カップルも親子も、自分のことを見向きもしない。
メディナの喧騒を離れ、のどかな雰囲気、とても心が落ち着く。
こういう、観光客が来ないような、穴場的な場所に来るのが好き。



高台から見下ろすフェズ・エル・バリは、もう絶景！
ここを今日、自分は歩いて来たんだなあ実感。
マラケシュのメディナを歩いた時のように、モロッコに来た達成感をここでもたっぷり味わった。

夕方 5 時頃、「アラー」というお祈りの声が、町全体に響き渡った。
辺りはだんだん暗くなり、町には明かりがつきはじめている。
そろそろ帰るかな...。
気が付いたら、ここに 1 時間もいた。寒いにもかかわらず。

ホテルまで、歩いて帰ることにした。
しかし、辺りはすっかり暗くなっており、来る時は迷わなかったものの、帰りは迷ってしまった。
なので、タクシーに乗ろうとするが...。
この時間、どのタクシーも人が乗っていて、捕まえられない！
乗客が降りてきたところを見計らって乗ろうとするが、「NO!」と断られたり、
タクシー乗り場に立っているにもかかわらず、横から来た人に先に乗られたり...。

うーん、困った。
その時、1 台のタクシーが自分の横に止まり、ドライバーが助手席のドアを開けてきた。
「どこへ行く？」と聞いてきたので、「オテル・ムーニア」と答えると、「乗っていいよ」と合図してきた。
しかし、後ろにはモロッコ人の女性が、すでに 2 人乗っている。
これ、大丈夫なのか？ちゃんと連れてってくれるのか？
料金はどうなるんだ？まとめて自分に請求されたりしないだろうな...。
と、少し不安に思いながらも、タクシーに乗り込んだ。
タクシーの車内、自分の真後ろに見知らぬモロッコ人女性が 2 人...何ともいえない空間だ。

10 分ほどで、ホテルのそばに到着。

ドライバーが降り際に、わざわざ車を降りて、あれがムーニアだと指さして教えてくれた。
親切なドライバーだった。本当に助かった。ありがとう、ドライバーさん。
しかし、後ろに乗っていた女性2人は、一体何だったんだろう...。
自分よりも先の目的地に行くのだろうか。
疑問が残った。

今日も、店はかなりの割合で閉まっているので、ホテルのレストランで夕食。

古都フェズの町、マラケシュとはまた違った趣があって、楽しかった。
途中、道に迷って焦ったけど。



12月11日(木)

今日は、ラバトへ列車で向かう日。
モロッコでの列車乗車も、今回の旅の条件の一つ。
列車の旅は、車や飛行機で移動するより、一番旅をしている気分になれるから好きだ。

朝食を済ませ、ホテルを出発。

駅まで歩いて10分ほどなので、徒歩で駅まで向かっていたところ、
1台のタクシーが、自分のすぐ横にやってきた。
重い荷物を持っているのを大変そうだと思い、これは乗ってもらえと思ったのだろうか。
せっかく止まってくれたので、乗ることにした。
タクシーの上に荷台が付いており、ここに荷物を載せる。
ここでもまた、後ろに女性が1人乗っている。

少し走ったところで、後ろの女性が代金を払って降りた。
よく見ると、メーターのところに1,2,3と3つのボタンがあり、それで相乗りをさせ、
料金を管理していることが分かった。

駅までの料金は、わずか4DH。

モロッコのタクシー料金は、本当に安い。

ガイドブックに、モロッコのタクシー・ドライバーは貧乏商売の一つと書いてあったが、この料金ならばそれがうかがえる。相乗りもさせないと儲からないのだろう。

5DH を渡し、1DH はチップだと言うと、ドライバーのおじさんは素直に喜んでくれた。

昨日のタンネリの青年もそうだったが、たとえ少ない金額でも、あげたチップに対し、素直に喜んでくれると嬉しいものだ。

さんざんチップに対してケチをつけてきた、マラケシュの人間とは大違い。

一部の人だけが、マラケシュの人はフェズの人に比べると、品が無いように思える。

さて、いよいよ列車に乗車。

乗る列車は、フェズ始発のマラケシュ行き。

1等車は前方2両だけ。残り8両は、全て2等車。



前方に向かい歩いていると、何とここで一昨日のツアーで会った日本人女性のグループと出会った。

しかも、何と席がそのグループの数人と同じコンパートメントだった。

このグループは、終着のマラケシュまで行くという。

列車は、2等車のシートは垂直で、ビニール張り。

1つのコンパートメントに、3人掛けのシートが向かい合わせになっている。

1等車のシートは、日本の特急列車のような快適なシートで、各席に肘掛けがあり、席が一つ一つ仕切られている。

あとのつくりは2等車と一緒にだった。

自分の席は窓側で、良かった。車窓を存分に楽しめる。

8時50分、列車は定刻通り発車。

車両そのものは新しくないが、乗り心地はとても快適。列車のスピードも、そこそこ出ている。

モロッコの列車は日本と違い、車内のアナウンスが全くといっていいほど無い。

駅のホームに「Gare(駅)de」と書いてある看板があり、それを見て駅名を確認しないとダメだ。

車窓からは、モロッコ特有の、白を基調にした家並みや野原、羊の姿も見る事ができた。

50 分ほどで、メクネスに到着。その先はまだ長い。
通路を車内販売のワゴンが通ったりもした。
同じコンパートメントのオーストラリア人グループも、寝たり本を読んだりと、
思い思いの時間を過ごしている。
向かいに座っていたオーストラリア人の女性から、クッキーやポテトチップをいただいた。

予定では、ラバト着は 11 時 42 分だが、5 分前になっても、ラバトらしき景色が見えてこない。
ちょっと不安になってきた。
けど、それから 10 分後、「Gare de SALE」と書かれた駅に到着。
ここがサレだから次だ。
サレを発車。
川を渡れば中心部に着くはずなのだが、大きく迂回して橋を渡っている。
ハッサンの塔も見えてきた。
そして、列車は 15 分遅れでラバト・ヴィル駅に到着。

グループに別れを告げ、列車を降りる。
駅前には、メイン通りのムハンマド 5 世通り。
ラバトは、自分のイメージではもっと静かなイメージだったが、この通りは車通り、人通りも多く、
かなり騒がしい。
ラバトは人口 100 万人を超えているというから、これくらい人通りが多くて当然か。

歩いて 2 分ほどで、ホテルに到着。
少し休憩してから、昼食を食べに行く。
駅の近くにマクドナルドがあり、日本のマクドナルドとの違いを見ようとする事にした。

中は、モロカンでいっぱい。外国人観光客は、誰一人いなかった。
調理場の忙しそうな風景は、日本のマクドナルドと全く変わらない。
店員の制服も、ほとんど一緒だ。
メニューもフィレオフィッシュバーガー、ビッグマックなどがあり、ほとんど変わらない。
客は、若者から中年層まで色々な年代の人が来ているが、共通しているのは、男女関係無く、
みんな小綺麗でおしゃれ。
他の都市のモロッコ人とは、雰囲気はかなり違う。

フィレオフィッシュバーガーのセットを注文することにした。
レジを担当していたのは、若い女の子。
自分は「フィレオフィッシュ」というが、なかなか通じない。3 回目ようやく通じた。
その後、このレジの子が何やら聞いてきたが、言葉がわからないので全て「イエス」で答えた。
多分ポテト、ドリンクは付けるかどうかだろう。

日本のマクドナルドでもそれは聞かれるから、だいたい推測できる。
ドリンクはコーラにして、注文完了。

商品は、すぐに出てきた。

日本でもたまにある、待ち時間が異常に長い下手なマクドナルドよりずっと早かった。

価格はセットで 44DH。日本円に換算してみても、日本のとそれほど変わらない。

マクドナルドの値段設定は、おおかた万国共通なのかも。

でも日本なら当たり前の金額だが、現地の人にとっては 44DH はかなり高額なのでは。

ここに来ている人達は、モロッコの中でも比較的富裕層の人達だろうと感じた。

空いているテーブルを探し、席に着いた。

マラケシュやフェズでは歩いているだけで、珍しそうに自分を見る人がいたが、

ここでは全くといってよいほど、そのような目で見られなかった。

逆に自分が周りをチラチラ見ていたくらいだ。

フィレオフィッシュバーガー、ポテトフライの味は、日本と全く変わらない。

バーガーが少し小さいように思えた。

モロッコのマクドナルド体験、個人的に色々な事が分かり、楽しめた。

この後、ハッサンの塔とムハンマド 5 世の霊廟を見に行くことにした。

タクシーに乗り、ハッサンの塔の前で降りる。

入口には、馬に乗った門番がいた。

まさか、この門番を写真撮影するのもチップがいるのかと思ったが、何も言われず安心した。



ハッサンの塔、ムハンマド 5 世の霊廟とも、とても美しい建築物だ。

ハッサンの塔は、未完でもこの高さがあるのは驚きだ。



また、ここから川を挟んで対岸にあるサレの景色がとても美しかった。



この後、ウダイヤのカスバへ。

門を抜け中に入ると、一人の男が声を掛けてきた。

一人で歩いていきたいのだが、「そっちは行き止まりだ」などと言ってきては、付いてくる。

「日本から来たの？私は大阪に友人がいるよ、私はここに住んでる者なんだがモロッコは初めて？」
などなど、色々なことを英語で話してくる。

何者だ？と思いながらも話につき合っていると、話は次第にカスバの歴史や造りの説明に入っている。
何か危険な香りがしてきた。

色々話を聞いてると「私はこのガイドだ」という発言が聞き取れた。

まずい、これは初日のマラケシュのおやじと同じ流れだ。この男は自称ガイドだ！

しかもこの男、勝手にガイドを始めている。非常にタチが悪い。

しかし、どうやって振り切るう...、何て言えばいいんだ？

考えている間に、次々説明をしだす。

海の見える所に来ては、あの町はサレだ、庭園に来ては、葉っぱをちぎって、

「この葉はモロッコ料理のスパイスに使われている」など延々と説明が続く。

自分のペースで観光したい自分にとっては、迷惑そのもの。

しかも、この男一体いくら請求してくるのだろうと思うと気が気じゃなかった。

そして約 30 分後、ガイド終了。

するとこの男「ガイド料 200DH くれ」と言ってきた。

これには自分も納得がいかない。

「何が 200 だ！ だいたいガイド頼んだ覚えはない！ 30 分で 200 は高すぎる。そんなに払えないね！」

と、正確に伝わったかは分からないが、知っている限りの英語を使って抵抗。

すると向こうは「モロッコ人に対してもこの値段だ！」と引き下がらない。

トラブルに巻き込まれても困るので、持ってけドロボーと思い、100DH 紙幣を渡す。

しかしこの男、これでも不満で、まだ「払え！」と言ってくる。

自分はこれ以上払う気はない。「NO！」と拒否し続けた。

このまま相手が暴力的な行為に及んできそうだったら払うしかないと思ったが、相手もようやく諦めて去っていった。

しかし、本当に不愉快だ。

勝手にガイドを始めて、金を取るうとする根性が許せん！

この男のおかげで、全くウダイヤのカスバを観光した気分になれなかった。

しかもこの男、自分がカスバを出た後も博物館の入口付近で立っており、カモにする観光客を物色していたように見えた。

「モロッコの警察よ、こういう輩をもっと取り締まってくれ。

こういう人間がいると国のイメージが悪くなるぞ。」と言いたい気分だ。



しばらく近くをぶらぶら歩いていると、2 人組の青年が話しかけてきて

「写真を撮ってあげようか？」と言ってきたが、また高いチップをふっかけられたくないので、断った。

マラケシュの時から思っていたが、このように気軽に話しかけてくるモロッコ人は、ただ交流したいだけなのか、それとも見返りを求めているだけなのか、理解に苦しんだ。

自分もできる限り、現地の人と交流はしたい。

けど、さっきみたいなことがあったから、どこまで信用してよいのか分からない。

かなり考えさせられた。

その後、向かいにあるメディナに入った。

ラバトのメディナはフェズ、マラケシュのとはかなり雰囲気が異なっていた。

まず、客引きが非常に少ない。
道端にゴミなどが落ちていることが少なく、きれい。
人はたくさんいるものの、あまり騒がしくない。
値札が付いている店が多い、といった具合だ。

ここで、旅の記念にとミントティー用のポットを買った。
そのまま歩いていくと、ハッサン2世通りに出た。車通り、人通りも多い。

ラバトを歩いていて思ったが、この町はとても整備が行き届いていて、とてもきれいな町並みだ。
建物もヨーロッパ風のものも多く、行き交う人々も、とてもオシャレ。

モロッコ人の女性は、肌の露出を控えるようにスカーフを頭から巻いている人も多いが、
ラバトの若い女性は8割位していなかったように思う。
ネックレスなどのおしゃれな装飾品を身につけ、ロングブーツやローライズジーンズなど
日本人の女性でも普通に行っているようなファッションの女性が多かったのには驚いた。

男性でも、カジュアルな服装の人が多い。
中にはモヒカンヘアにしている人がいて、ひと際目立っていた。
若い男が女性をナンパしている光景も、多数見かけた。

ムハンマド5世通り沿いには、おしゃれなブティック、靴屋、紳士服店、カジュアル洋服店などが
建ち並んでいる。
ショーウィンドウ内の商品には値札が付いており、どの商品も数百～数千DHの高額なものばかり。
これまで訪れたモロッコの都市では、全く無かった光景がいっぱいだった。
モロッコは、地域によってかなり生活水準に差があるのを感じた。



夕食は、駅の近くにあるレストランで食べ、少しまたラバトの新市街を歩いてからホテルに帰った。
ラバトは観光地そのものは多くなかったけど、モロッコの中でも近代的な町を見れて、
個人的には楽しかった。

モロッコ一人旅も、あとカサブランカで終わり。
もう少しいたいという気持ちと、そろそろ日本に帰りたいという気持ちが入り混じっている。
そろそろおいしいお米が食べたくなってきた。

12月12日(金)

今日はモロッコ最大の都市、カサブランカを訪れる日。
これまでの都市とは全く違う光景が見れそうで、楽しみ。
だが、大都市だけあって色々な人間が集まっているだろうから、治安面が少し心配。

カサブランカまではここから約1時間で行けるので、朝はゆっくりできる。
朝食を済ませ、部屋のドアを開けると...メイドさんが中にいて、互いに目が合いビックリ。
メイドさんは申し訳なさそうに出て行った。
もう少しゆっくりしようと思ったが、トイレとベッドは清掃済みだったので使わないようにし、
あまり長居しても悪い気がして、結局予定より早めに出ることになった。

駅でカサブランカまでの切符を購入。
乗車時間が1時間なので、今回は2等の切符を買った。



カサブランカ行きの列車は、2階建の新型車両。
乗車すると、モロッコ人がたくさん乗っていた。

この列車は、真ん中が通路になっていて、左右に2人掛けの席が並んでいる。
上の荷台は小さく、大きい荷物は載せられない。
初めは隣の席が空いていたのでそこに置いていたが、途中からだんだん混んできた。
モロッコ人のおじさんが座る席を探しているようだったので、荷物を膝の上に置いて席を空けると、
「どうもありがとう」というジェスチャーを見せて横に座った。
キャリー付きのポストンバッグにしておいて良かった。スーツケースなら、まず膝には載せられない。

列車は海沿いを走っていて、大西洋の眺めがとてもきれい。
かなり早いスピードで走っている。

この列車も車内アナウンスが無い。

車内を見渡すと、コピーベルトがあった。

日本の電車なら、ここに次に停車する駅名が表示されるのだが、ここは「ONCF(モロッコ国鉄)」という文字が左右に行ったり来たりしてるだけ。

何の意味も無いじゃないか！ そんなに社名をアピールしたいのか？と、思わずつつこみたくなった。

でも、列車は(カサブランカの)カサ・ポール行きなので、乗り過ごす心配は無い。

そして列車は、カサ・ポール駅に到着。

駅前は大きいホテルが1軒あるだけで、あとはこれといった建物が無い。

ガイドブックに載っていた centre 2000 というショッピングセンターも、跡形もなく消えている。

とりあえず、ホテルを探す。

事前の情報では、メディナの城壁に沿ったアルモハド通りにあり、駅からも遠くない距離とのこと。

しかし、城壁らしき壁が全く見当たらない。タクシーに乗ろうかと思ったその時、目の前を見ると

「HOTEL Anfa」と書かれたホテルがあるではないか！ 灯台もと暗し。駅から徒歩1分。

このホテルのホームページの地図、かなりアバウト。駅からこんなに近いとは思わなかった。

10階建のキレイなホテルだが、こんなに近くにあるとは思わなかった。

しかし、大きいホテルなのにガイドブックには一切書かれていない。

ガイド本のメディナの拡大地図では、このホテルの場所には城壁の図が描かれているだけ。

これじゃあ、すぐにわかるはずもない！

部屋は4つ星ホテルだけあって、かなりゴージャス。バス、トイレも別。

しかし、テレビはチャンネルが映らず、エアコンリモコンが作動しなくて使えない。

しばらく休憩し、カサブランカの町を歩き出す。

この町もラバトと同じく、人々はほとんど話しかけてこない。

広い町だが、中心部は比較的たやすく地理がつかめた。

カサブランカはスペイン語で「白い家」という意味らしいが、本当に白いビル、家がたくさん。

他の色のビルは無いんじゃないかというくらい。



国連広場周辺は、高層ビルやホテルが建ち並び、人通り、車通りも多くて賑わっている。
都会的だが、東京と比べてしまうと、かなり規模が小さい感は否めない。

この近くのファーストフード店で昼食。
カサブランカの人々も、都会的な恰好をした人が多い。
特におじさん方が、紳士的な身なりをしている人が多かった。

今日は、カサブランカの見どころであるハッサン 2 世モスクが見学できないので、
ここは明日に回し、町を色々歩きまわることにした。

ムハンマド 5 世広場へ来た。
ここには水売りのおじさん達がいるというが、その姿は全く無し。
噴水も水が出ておらず、人も少なくてさびれた広場だった。

大通りから 1 本裏道に入ると、どれも同じような白い建物がたくさん。
メディナとはまた違った意味で迷いそうになる。

この後は、国連広場の近くから旧メディナに入った。
すると、なにやら路地に絨毯を敷き、その上におじさん達がたくさん座っている。
店の人も出てきていて、この時間は商売をしていない。
どうやら、お祈りの時間のようだ。さすがムスリムの国。熱心な信者が多い。

ここ旧メディナは、カサブランカの都会的な雰囲気からタイムスリップしたかのような古い町並み。
古くからの民族衣装を着た人々がたくさんいて、庶民的な雰囲気だ。

メディナの城壁の外側にも店が並んでおり、ここは若者向けの商品を扱っている店が多い。
日本でも販売されている iPod を置いてある店もあった。
モロッコでもパソコンが普及してきているのが分かる。
魚やスパイス、中にはミントの葉を束にして売っている店や、ニワトリを生きたまま売っている店もあった。

一度ホテルに戻って休憩。
市街地とホテルが近いと、本当に便利。
夕方からまた町へ。
カフェ・レストランに入って串焼きとポテト、タイ米のような米が入ったディッシュを注文。
米はあまりおいしくない。

夜のカサブランカを歩く。
車通りが多く、町中にクラクションの音が鳴り響く。
横断歩道を渡るのも一苦労。

昼もそうだが、夜のカフェも人でいっぱい。
モロッコ人は、おしゃべりするのが好きなのだろうか。
お互い頬と頬をくっつけて、キスをする挨拶をこの町の至るところで見かけた。
男女の関係なら分かるが、男同士でも普通にやっている。
特におじさん世代の人々がやっていると、非常に目立つ。
この挨拶を見ていると、なぜかほのぼのとした感じになってくる。
日本では考えられない挨拶だ。

夜、9時くらいまでぶらぶらし、ホテルに帰った。

モロッコで過ごす夜は、今日が最後。
明日は、ハッサン2世モスクを見て終わりだ。
一人きりのカサブランカ・ナイト。
モロッコに来てから、一人でも寂しいと思ったことは無かったが、この時ばかりは何故か寂しい。

12月13日(土)

いよいよ、今日がモロッコ最終日。

朝食後、タクシーでハッサン2世モスクまで行く。
まず、驚いたのが敷地の広さ。
大きい広場の向こう側に、堂々と構える巨大なモスク。
ミナレットの高さは200メートルだというから圧巻だ。
近づいてみると、改めてその大きさが分かる。
色合いも美しい。ベージュに緑を基調とした造りになっている。



モスクの向こう側は、大西洋。潮風がとても心地よい。
カサブランカは、他の町よりも寒くない。

そして9時になり、いよいよ開館。

料金は 120DH と、他の施設の入場料と比べると格段に高い。
それだけ、このモスクを建設するのに費用がかかったのだろう。

モスク内の説明は英語、仏語、スペイン語など数カ国語の専任のガイドがついて説明してくれる。
この時間帯は人も少なく、英語コースを選んだのは自分と USA から来たという若い女性だけ。
この女性も一人旅だった。

ガイドは、陽気なモロッコ人のおじさん。
服装はちゃんとスーツを着ていて、街中の自称ガイドとは風貌がまったく違う。
自分と女性を両サイドに付け、腕を組んできたりと、とても面白い。

靴を脱いで、中に入った。
中も相当広く、端から端まで数百メートルはある。
壁や天井には、イスラム文化特有の緻密な模様が彫られている。
また地下には巨大な泉やハمام、浴室があり、信者のために至り尽くせりといった感じだった。



40 分ほどでガイドは終了。
モスクをあとにしようとする、ガイドの方が「ローチップ？」と問いかけてきた。
日本の場合なら、基本的に入場料にサービス料が含まれており、このような場合払う必要はない。
日本はサービス料込、モロッコはサービス料別と考えた方がいいのかも。
このチップの習慣、最後まで完全に馴染むことはできなかったが、こういう考え方、
文化の国もあるということを感じた。
でも、このガイドの方は「スモールマネーでいいから」と言ってきたあたりが、品の良さを感じさせる。

さて、送迎の時間までは、あと 3 時間ほどある。
現地の通貨も 400DH 残っているので、これを使い切ろうと思い、買い物をしようと計画を立てる。

ハブブス街に足をのばして、時間通りに帰ってこれなくなっても困るので、
旧メディナで買い物をすることに。
旅の記念にと、女性が巻くイスラムスカーフと、民族衣装を 1 着購入。
これで、家でもモロッコ人に変身できる。

そして、12時にホテルに戻り、チェックアウト。13時頃、送迎の車が来た。
とても立派な車で、スラッとした顔立ちの良い男性が「Fさんですか？」と声を掛けてきた。

いよいよ、この一人旅も終わるんだな...。
少しさみしくなった。

空港に向かう車内、英語で色々話し掛けられるが、断片的にしか聞き取れず、半分くらいは分からない。
今回の旅では、この言葉の壁というものを非常に感じた。
モロッコは英語圏ではないが、もう少し英語を勉強しておいた方がいいなと思った。

40分程で空港に到着。
送迎の担当の方が、チェックインの方法や両替のことなど細かく教えてくれた。
免税店では円も使えるので、買い逃した土産物をここでたくさん買い、パリ行きの飛行機に乗り込む。
乗客のほとんどはモロッコ人。

そして飛行機は離陸。
さらばモロッコ。次はいつ来れるだろうか...

パリで乗り継ぎ。
成田行きの搭乗口の前。日本人がたくさんいて、ようやく日本に帰るんだなあという実感が湧く。

12月14日(日)

成田行きの飛行機の中。
本を読んだり、音楽を聴いたり、眠ったり、ガイド本を見て思い出にふけったり...

夜19時30分、定刻通り成田空港に到着。
無事、日本に帰ってこれて良かった！

到着ロビーに進んでいる途中、「お帰りなさいませ」の大きい文字が見えてきた。
これを見て、本当に日本に帰ってきたことを実感した。
家族に電話で無事日本に帰ってきたことを報告。

夜10時、自宅に到着。
これと同時に、12日間のモロッコ一人旅が終了した。